

# 外国人生徒の受け入れ に対する高校教師の意 味づけ —特別枠校を事例に—

大東 直樹\*

## I. はじめに

わが国に居住する外国人およびその子弟は、1989年に改正された「出入国管理および難民認定法」が翌年に施行されて以降、この30年間で急速に増加してきている。こうした背景のもと、日本の小・中・高校に在籍する外国人の子どもも増加しており、実際に異なる社会・文化的背景をもつ児童生徒とかわる教師の指導方法にも変化が求められている。近年では、増加する外国人児童生徒に対して、「適切な」教育をいかに保障するかが問われているからである。ここでいう「適切な」教育とは、宮島(2014)も指摘するように「格差原理」(ロールズ, 1979, p. 178)にもとづき、「公正」という観念に裏打ちされた対応のことをいう。

先行研究を概観すると、これまでも教師の教育行為の分析を通して、学校文化の存立メカニズムや変動プロセスを探求しようとする研究が数多く蓄積されてきた。なかでも、入学者選抜を必要とし、「適格者主義」を基本としてきた高校は、「国籍や文化的背景が異なっていようが、そんなこととは無関係に授業が成り立つはずだ」という前提が共有されやすい(中島, 2008, p. 57)ため、外国人生徒、とくに日本語指導が必要な生徒を受け入れることは、「公正さ」をめぐる問題が表面化しやすい(川崎, 2012)。こうした背景のなかで、外国人生徒を受け入れた高校においては、「社会的・文化的背景を異にする多様な生徒にどのように対応するかは研究的にも実践的にも大きな関心を集めつつある」(児

---

\* 神戸大学大学院国際協力研究科研究員

島, 2016, p. 57) との指摘があるように、高校を事例とした研究は近年、確実に増加しつつある。たとえば、角田(2012)や稲田(2012)は、「公正さ」をめぐる教師の葛藤を学校文化変革の契機として捉え、「公正」概念に対する教師の解釈や、その解釈が変化していく過程を描き出している。

しかしこうした先行研究の最も大きな課題は、学校文化変革の契機の探求に関心が向くあまり、「教師の関心」にはあまり目が向けられていない点にある。外国人生徒の受け入れにあたり、教師は「公正さ」とは何かという点ばかりを考えているわけではないだろう。久富(1998)が、「日本の教員という仕事は『無限定性』を職業倫理として価値理念化する職業」(p. 68)だと指摘するように、教師は様々な仕事を日々こなしている。そのため、外国人や「公正さ」という「研究者の関心」だけから教師の認識や行為を捉えるのではなく、教師の側に立って「教師の関心」にも目を向ける必要があると考える。

その点において、児島(2006)の分析は示唆を与えてくれる。児島による中学校での調査によれば、教師は外国人生徒を受け入れるにあたり、「国際理解教育」という関心をもつようになり、その一環として国際クラブを発足したという。これについて児島は、「学校文化の枠組みを変えないままで行われるナイーブな『国際理解教育』は、『他者のルール』が支配する学校を日々生きなければならないニューカマーの子どもたちにとって、きわめてリアリティに欠けるもの」(p. 172)と指

摘し、そうした自文化中心主義的な学校文化の上に成り立つ国際理解教育という試みが、「『博物主義的』な文化交流に終始しがち」(p. 207)であることを批判している。

こうした知見から本稿で注目したいのは、外国人生徒の受け入れをめぐり、教師は生徒が抱える日本語や学校適応といった教育課題にだけ目を向けているわけではないことである。この知見が参考になるのは、「自文化中心主義」という学校文化を基盤にして、外国人生徒の受け入れを、教師たちが「現場の論理やかれらが重視する価値観と接合しよう」と(山田, 2018, p. 129)している点にある。

ただし児島(2006)の研究は、教師の教育行為を規定する要因を、文化的基盤に比重を置き説明しようとしている点に課題が残る。これは、教師の教育行為を彼らのおかれた文化的条件に規定されていることを指摘する一方で、教師を取り巻くより広い文脈、すなわち社会的、制度的な側面の拘束性を看過しているといえる。実際、学校文化や教師文化というものは、「教師たちが置かれている社会的・制度的位置と、日々の教育活動・教育実践とを媒介して、そのつなぎの部分に存在し、働いている」(久富, 1994, p. 200)ものである。したがって、教師の教育行為を文化的基盤から説明してきた従来の研究は、より巨視的な視点で捉え直せば、学校や教師を取り巻く社会的・制度的側面の影響力という点に課題を残しているのである。

そこで本稿では外国人生徒を受け入れることを高校教師たちはどのように受けとめ、ど

のような意味づけをするのかを検討し、その上で、それがどのような要因によって構成されているのかを検討したい。こうした作業を通して、外国人の子どもの教育研究でも、教師側の論理に目を向けていく必要性があることを示したい。

以上の分析を進めるあたり、本稿の分析の視点を2つ、簡潔に説明しておこう。第1に、外国人生徒の受け入れに対する教師の意味づけがどのようになされるのかを検討する上で、教員文化研究の知見が有効である。Shimahara & Sakai (1995) が提唱するエスノバダゴジーである。彼らは、日本の教師の指導の特徴として、教師が子どもたちと「きずな」や「信頼関係」の構築を重視していることを指摘している。教師はこうした指導観を間主観的に構成し、指導の基本としているという。

第2に、教師を取り巻く社会的・制度的側面として学校に求められるアカウントビリティに着目し、こうした側面が教師文化や教師の意味解釈に与える影響を検討する。なぜなら、現在の高校を取り巻く状況として、かつての厳しい管理教育からカウンセリングマインドが求められるようになっていく一方で、2000年代には、学校への厳しい視線を意識して、アカウントビリティを確保（吉田, 2018）しようとする動きが見られるからである。本稿ではこうした知見を援用しつつ、外国人生徒を受け入れることの教師の意味解釈とその構造を描いていくこととする。

ここで一度、従来の研究と本稿の相違点を

あらためて整理しておこう。

第1の相違点は、本稿では教師の側に立って教師の実践を検討することで、従来、多くの研究で研究者の関心から分析されてきた際には埋没してきた外国人生徒を受け入れることの教師なりの論理に着目している点にある。本稿では、「教育問題」という観点から教師の行為を検討していくのではなく、受け入れることそのものへの認識とその構成を、可能な限り教師の立場に立って検討する。

第2の相違点は、従来の研究が教師の教育行為を文化的基盤の影響から説明しようとしてきたことに対して、本稿では、社会的・制度的側面が教師に与える影響力も踏まえて検討する点にある。

以上のようにして先行研究との差異化を図ることで、本稿では、学校や教師の置かれた現状から構成される現場の受け入れ論理を明らかにすることができる。こうした作業を経ることによって、「適切な」教育保障がいかにして可能かを議論していくための土台を別角度から補強することにつながると思う。

本格的な議論に先立って、ここで本稿の構成を整理しておく。続く第2節では、調査概要を説明する。その際、本稿が着目する高校教育の現状を先行研究から整理した上で、本稿の事例について簡単な説明をおこなう。第3節では、外国人生徒を受け入れることに対して、教師がどのような意味を付与するのかを、その意味づけの多様性に注意しながら検討をおこなう。具体的には、先行研究で指摘されるような、学校が重視する価値観への接

合作業に着目する。第4節では、第3節で見出した意味づけがどのような構造的要因によって形成されるのかを検討する。第5節では本稿のまとめと、結果に対する本稿の解釈を提示する。

なお本稿では、外国人（児童）生徒の定義を「外国にルーツをもつ」（児童）生徒として議論を進める。なぜなら近年、グローバル化の進展とともに文化的・社会的背景を異にする外国籍の子どもが増加するだけでなく、日本国籍であっても両親の国際結婚等により「外国にルーツをもつ」子どもも増加しているからである。そのため、国籍によって「日本人」と「外国人」の文化的境界線を分けることはますます難しい状況になってきており、それに応じて彼らの教育をいかにして保障するかがいっそう複雑な問題になってきている（山本, 2014）。ただし、国籍が重要である場合は外国籍（児童）生徒という語を用いる。

## II. 調査の概要

本稿では、高校の教師を対象として検討を進めていく。「教師の仕事や役割を考察する上で、現在の高校がどのような状況にあるかを概観することは重要」（油布, 2015, p.72）であるため、まずは油布（2015）の説明を以下で整理しておこう。

油布（2015）によれば、日本の高校は戦後からその量的拡大を続け、アメリカの社会学者 M. トロウの指摘するユニバーサル段階に

あることで生徒の多様化が進み、現在では新たな教育内容や指導方法を工夫することが必要になっているという。生徒が多様化するなかで、教師が直面するのは学習指導、生徒指導、進路指導のあり方の変化と対応の工夫である。とくに本稿と関連する高校では、以下のような課題が当てはまる。

具体的には、生徒の多様化にともなって学習意欲の低い生徒や義務教育段階の学習内容が未定着な生徒などを生み出している。とりわけ序列で下位・中位の教育困難校や進路多様校ではそうした問題が顕著であり、こうした高校では進路指導がより困難になっている。また高校の「楽校化」が進むなかで、「共感的理解」や「カウンセリングマインド」が求められ、「心地のよい学校＝居場所」が目指される一方で、アカウントビリティが厳しく問われる現在、コンサマトリー化した生徒を責任ある社会人としてどのようにして社会に送り出していくかという問題と板挟みにもなっている。また、課題を対処するために、教師個人に過度な負担をかけずに、学校全体として機能するための学校の組織・運営上の問題も存在する。しかし、「高校教育に期待されている新たな課題を遂行する一方で、こうした課題に取り組むには、時間があまりにもない、というのが高校教師の本音」（油布, 2015, p. 84）だという。

こうしたなかで本稿が事例とするのは、関西地方 J 県で「外国人生徒に対する高校特別入学枠制度」（以下、特別枠）を実施する公立高校である。特別枠とは、特定の外国人生

徒を対象にして、科目減や特別な試験によって入学者を選抜する枠である(乾, 2008)。いわばアフーマティブ・アクションの一種であり、主として都道府県レベルの公立高校で実施されている。しかし実施は自治体ごとの判断により、その内容は地域によって異なることも多い。この制度は、基本的に来日間もなく日本語能力が不十分な生徒を対象に実施される。それが、入学試験を必要とし「適格者主義」と言われる高校で実施されるため、高校教師にとっては特別枠を利用し入学してくる外国人生徒(以下、特別枠生徒)は極めて「異質な」存在として映ると思われる。

筆者は、J県で特別枠をもつ高校3校に、2016年6月から2019年3月の間に不定期で教師、生徒の両方にインタビュー調査を主としておこなってきた。そのうち調査対象となった教師は20名、特別枠生徒は16名である。本稿の調査に関しては、上記高校から2校、6名の教師へのインタビュー結果を用いる。選定の理由は、彼らが特別枠の担任教師、特別枠の管理責任者の教師、授業を担当する教師、学年主任、部活動の顧問など、特別枠生徒と特にかかわりの深い教師だからである。

学校のタイプはX校が普通科単位制高校であり、Y校が総合学科高校である。両校の入学難易度は公立高校のなかで平均的、もしくはやや高いレベルの進路多様校である。J県の特別枠は来日3年以内の外国籍をもつ生徒を対象に実施されている。調査時点(2018年12月)での特別枠生徒の人数は、X校に9名、Y校に6名である。どの生徒も日本語

の運用に課題があるが、そのレベルは生徒によって異なり、日常会話程度の生徒も入学する。また、特別枠生徒以外で教師が把握している外国にルーツをもつ生徒は、両校ともに3学年合わせて数名いるかどうかである。2校とも特別枠を実施し始めたばかりのため、教師は手探り状態のなかで生徒への対応にあたっている。

本稿のテーマと関連する調査協力校の教育的特色をみると、両校ともに「個性を尊重する教育」という特色が見られた。また、高校が所在するそれぞれの市は、X校が中核市に、Y校が政令指定都市にあるため、J県のなかでも外国人居住者が比較的多い地域である。そうした背景もあって、両校ともに教育的特色や教育目標のなかで「国際性」という視点を打ち出しており、実際に海外の高校との交流なども行われている。

こうした地域であるため、これまでの教職歴のなかで、外国にルーツをもつ生徒への指導経験を有している教師も少なくない。しかしほぼすべての教師にとって、日本語指導が必要な生徒を指導することは初めての経験である。

本稿の調査協力者は表1の通りである。調査のたびに数名の教師に、1時間程度の半構造化インタビューをおこなった。場合によっては、同一の教師に複数回のインタビュー調査を実施している。なお、教師の名前は全て仮名である。



表1 調査協力者リスト

No.	名前	性別	担当教科	立場	教職年数
1	藤井先生	女性	英語	X 高校教員／特別枠の管理責任者	約25年
2	井岡先生	男性	理科系	Y 高校教頭	約35年
3	湊先生	男性	保健体育	Y 高校教員／特別枠生徒の授業担当	約30年
4	佐藤先生	女性	英語	Y 高校教員／特別枠生徒の部活動顧問	約30年
5	織田先生	男性	英語	Y 高校教員／特別枠生徒のクラス担任	約10年
6	鈴木先生	男性	英語	Y 高校教員／特別枠生徒のクラス担任	約20年

出所：筆者作成

### Ⅲ. 外国人生徒をく受け入れることへの意味づけ

#### 1. 制度の趣旨に沿った意味づけ

本節では、特別枠で外国人生徒を受け入れることに対して、教師がどのような意味を付与するのかに着目して検討していきたい。まず初めに、本稿の事例となる特別枠がいかなる趣旨で実施されているのかを整理しておこう。J県の特別枠の募集要項によれば、特別枠は「県立全日制高等学校で学ぶ意欲があるにもかかわらず、渡日間もなく日本語運用能力やコミュニケーション能力が十分でない外国人生徒を対象に、入学者選抜方法の工夫、入学後の学習支援を行う特別枠選抜を実施することにより、学習機会の充実を図る」ことを目的に実施されている。その背景には、外国人生徒の高校進学率が日本人生徒に比べて低い状況がある。

それでは、こうした格差の是正を背景とした特別枠での外国人生徒の受け入れに対して、教師はそれをどのように受け止めたのだろうか。こうした問題意識から教師へのインタビュー調査を実施するとまず明らかなのは、「特別枠なのだから、一般枠生徒とは異なる特別な配慮が必要である」という方針の

もとで両校が対応しようとしていることである。そのため、両校は科目としての「日本語」、「取り出し授業」の実施、母語支援員の配置、校内委員会の設置など、日本語指導が必要な特別枠生徒に対応した校内支援制度を整備している<sup>1)</sup>。こうした「特別な配慮が必要」だという認識をみると、両校ともに特別枠が実施された背景と趣旨を理解し対応しようとしていることがわかる。

もちろん、両校ともに日本語指導が必要な生徒を受け入れることは初めての経験であり、制度導入時には現場の混乱もインタビュー調査を通じて数多く確認された。とはいえ、以下で佐藤先生が、「こういう時代（高校で日本語指導が必要な生徒を受け入れるという状況）がいつにきたか…」と語っているように、J県では、小中学校段階ですでに外国人の子どもの増加を経験していたことや、「人権研修会」や「同和教育」を通して、教師間での差はあるものの、高校の教師でもそうした教育課題を認識しているようである。そのため、高校で日本語指導が必要な生徒を受け入れるという初めての経験に混乱はしつつも、「形（特別枠の実施）としては当然のこと」と語るように、佐藤先生はその必要性を認め

ていた。

佐藤先生：特別枠で、外国人が来てということで、「こういう時代（高校で日本語指導が必要な生徒を受け入れるという状況）がついに来たか…」と思いました。県がこういうことをしたというのは、それだけニーズがあるんだなと。形（特別枠の実施）としては当然のことですよね。特に日本では中卒だとどうにもならないから。

筆者：先生はなぜそんなにお詳しいのですか？

佐藤先生：まずは英語という教科ですよね。あとはホームルームの時間でニューカマーのこととかをしたり。これまでにも人権研修会とか、J県だと同和教育とかですかね。<sup>2</sup>

こうしたなかで、以下のインタビュー結果のなかで佐藤先生が、「彼らが知っていることと、学校では当たり前のことにはギャップがありますよね」と語っているように、佐藤先生は日本の学校文化という視点に着目し、生徒の持つ文化との差異に対応しようとしていた。

佐藤先生：（特別枠生徒）Aの話だけど、「さて、Aが来た。どうしよう」となって、英語でも国によって教

えることが違いますよね。歴史観が違うし、内容も絶対に違うがある。家庭科とか体育なんてない国もありますし。彼らが知っていることと、学校では当たり前のことにはギャップがありますよね。「前に習え」とかも分からない可能性はありますよね。なのでJ県が多文化共生のホームページで出している「学校生活の日本語」と、X校ならではのものから日本語のリストを作ってAに渡しました。先生と呼ぶ文化とかね。海外だと先生を名前前で呼ぶとかありますからね。あと外ぐつとか、スリッパとかね。<sup>3</sup>

同時に、こうした対応を試みつつも、以下で佐藤先生が「今していることを制度として残していかないといけない」、また「ノウハウを蓄積できるのかっていう問題がある」と語っているように、特別枠を実施するという「形」だけでは問題の解決にならないことを指摘し、その制度の質的な充実の必要性を認識していた。

佐藤先生：これから志願者が増えていろんな子が来た時に、先生たちは異動していく。だから今していることを制度として残していかないといけないですよね。私は、

公立だからこそ税金で教育・福祉にこういうお金はかけるべきだと思っています。私立だとかなかなかそういうわけにはいかないけどね。(中略)絶対に必要ですよ。だってそこに(助けを必要としている生徒が)いるんだもん。

佐藤先生：今後、枠は増えるんじゃないかな？ノウハウを蓄積できるのかって問題があるよね。今みたいな甘い体制の中、何ができるのか？っていうのが本当に心配すること。日本語できないのに進級できなかつたらね…。自助努力とか自己責任では絶対に無理ですよ。<sup>4</sup>

## 2. 異文化理解という期待

以上で確認してきたように、教師は特別枠が実施される背景と趣旨を認識し、その認識に基づいて対応を模索していた。この点で、特別枠による外国人生徒の受け入れに対して、教師は外国人生徒と日本人生徒の間にある高校進学率格差の改善への対応だという意味を付与していたといえる。

しかし調査を続けていくなかで、特別枠に対する教師の意味づけがこうした格差への対応だけではないことが見えてきた。それは後で確認するように、教師間での認識に差はあるものの、特別枠での外国人生徒の受け入れ

を、日本人生徒の異文化理解力の涵養に寄与するものとして、教師が「追加的に」意味づけていることである。こうした外国人生徒の受け入れを「異文化理解」と関連づけて期待する教師の姿は、前掲した児島(2006)の研究にも類似するものが示されていたが、本稿のように、特別枠という制度として明確な受け入れ趣旨がある事例であっても、教師は趣旨とは異なる異文化理解という可能性を期待するようである。

先述した通り、異文化理解教育という可能性をどの程度期待しているかは教師によって異なる。より厳密に言えば、そうした期待は教師の職階によって異なり、その教師が特別枠生徒とどの程度近い関係にあるのが重要な要因になりやすい。具体的には、特別枠生徒の担任教師は特別枠生徒の適応状況や学習状況により関心が集中する一方で、校長や教頭などの管理職は、特別枠生徒の状況だけでなく、クラス・学年・学校全体への影響にも関心が向きやすいようである。

たとえば次の会話は、管理職である井岡先生と筆者が調査状況について意見交換をしていた時の内容であるが、井岡先生は特別枠で外国人生徒を受け入れたことによって、日本人生徒にどのような影響があったのかに関心を示していることが分かる。

井岡先生：さっき先生方に話を聞いていたみたいだけど、全体の(全生徒に対する)アンケートとかしたら？学年主任の先生にでも頼ん



でみたら協力してくれるでしょう。

筆者：ありがとうございます。ぜひ伺ってみます。

井岡先生：お互い、win-winの関係でしょう。(中略) もっと他の生徒(日本人生徒)への影響とかアンケートとったらいんじゃない？(後略)<sup>5</sup>

ここでいう影響とは、外国人生徒と日本人生徒の文化的な交流の影響を指しているのだが、こうした井岡先生の期待は、担任教師の目にはどのように映っているのだろうか。次のインタビュー結果は、井岡先生が異文化理解といった可能性を期待していることを知った筆者が、特別枠生徒の担任教師である織田先生に、この点についてどのように考えているのかをうかがったものである。

筆者：井岡先生(管理職)は日本人生徒へのフィードバックに期待しているみたいですが、その辺はどうお考えですか。

織田先生：そんなところに期待されてもな…。異文化理解とかグローバルとか、そういうのはないですね。期待するならクラスの1/4くらい人数が欲しいですよ。担任としては、期待するポイントが違うのではと思っています。(中略)(特別枠生徒)Bくん、Cく

んはおとなしいですしね。まあおとなしいのも、言葉の問題が大きいのか、元々のパーソナリティなのかは分からないですけど、積極的なものは生まれませんね。<sup>6</sup>

特別枠生徒の担任教師である織田先生は、「異文化理解とかグローバルとか、そういうものはない」、「担任としては、期待するポイントが違うのではと思っています」と語り、管理職である井岡先生とはかなりの温度差があることが確認できる。特別枠生徒の人数や生徒自身の性格などから、織田先生は現実問題として文化的交流の可能性に対してはかなり懐疑的な意見をもっていた。むしろ担任レベルでは、「特別枠生徒が」どうなるのかに多くの関心が向いており、「日本人生徒が」どうなるのか、ましてや現状の人数や状況から文化的交流が盛んに行われるようなことはほとんど期待していなかった。ただし、管理職も特別枠生徒自身の状況にまずは注意を払っており、その上で文化的交流の上での異文化理解力の涵養という期待をもっていることはあらためて強調しておきたい。

このように、異文化理解という可能性に対して、管理職と担任教師の間にはかなりの温度差がみられるわけだが、とはいえ、学校全体としては多くの教師が多かれ少なかれこうした期待を抱いていることも確認できる。

こうした職階の違いによる期待への温度差があることを受け、その他の教師は異文化理

解という可能性をどのように考えているのかをアンケートを用いて調査した。アンケート調査はY校の教師53名に実施した。アンケートでは、「特別枠によって日本人生徒の異文化理解が促進されると思うか」という問いを設定し、回答として「そう思わない」「あまり思わない」「どちらかというと思わない」「やや思う」「そう思う」という5つの選択肢をとった。その結果が図1である。図1をみると、「そう思う」「やや思う」という肯定的な回答が全体の90%を占めていることが確認できる。そのうち、「やや思う」が61%を占めるため程度の差があることには

留意しなければならないが、こうした結果を踏まえると、特別枠に対して多くの教師が異文化理解の可能性を期待しているといえるだろう。

#### IV. 異文化理解という期待を生じさせる構造的要因

それでは、なぜ教師たちは特別枠の趣旨とは異なり異文化理解という期待を持つようになるのだろうか。以下では、その理由を教師文化とアカウンタビリティという視点から考察してみたい。

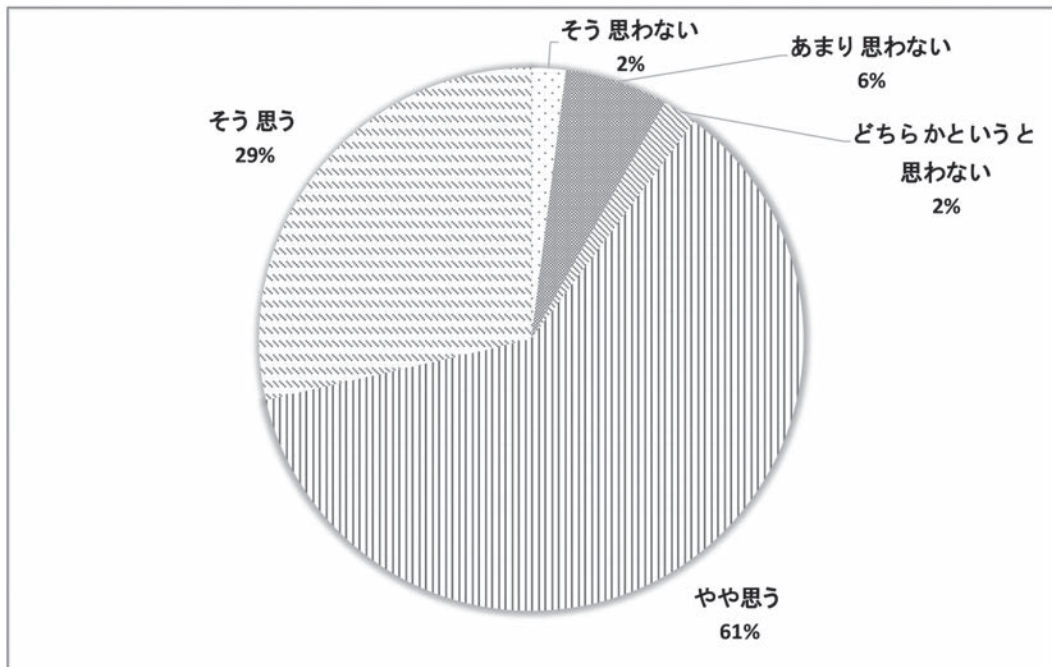


図1 異文化理解に対する教師の期待

質問：特別枠によって日本人生徒の異文化理解が促進されると思うか

出所：アンケート調査（2018年5月実施）より筆者作成  
注）アンケートに回答した教師は53人。

## 1. 生徒同士の関係性構築を重視する教師文化

インタビュー調査を進めるなかで、教師たちは何よりも特別枠生徒が学校生活で構築していく人間関係に多くの関心を向けていることがみえてきた。そのため誤解を恐れずにいえば、たとえば生徒のテスト結果が上がった／下がったなどということよりも、元気そうにしているか、クラスに馴染んでいるか、生徒同士で揉め事がないか、あるいは遅刻や欠席が続いていないかなど、生徒の日々の様子に教師の関心はより多く向いていた。

生徒同士が良い関係性を構築することを教師が重視しているのは、教師がそこに様々なメリットを感じているからである。ここでいうメリットの代表的なものが、生徒の学校適応に関することである。つまり、生徒同士の良い人間関係が生徒の学校適応を促してくれるという期待である。以下は、鈴木先生にクラスで担当する特別枠生徒 A の入学当初の状況とそれへの対応について問うた時の語りである。

鈴木先生：まず第1に考えたことは、「他の生徒とどう交われるか」ということでした。まずはクラスに放り込んで様子を見るという感じでした。でもまあ、和やかなクラスだし、うまく滑り出せたと思います。クラスにも「外国の子がおるからね。分からないことあったら教えてって、声か

けたって、手伝ってあげて」というようなことは言いました。だから、Aが孤立しないことを心がけました。（中略）

とは言っても、最初はとくにどう振る舞ったらいいか分からんというのが A にもあったと思います。休み時間になると廊下とかを彷徨ったりしてました。1年の時は、とくに夏休み前みんなが学校に慣れてからほとんどこれ（1人で彷徨うなど）でした。今はクラスに気の合う友達ができ、まだたまにそういうこともあるけど、その時間は少なくなったかな。「どう接したらいいのか」というのが A もその他の生徒も分からんのでしょうか。（中略）

あとは文化的なものが違うので、自分の都合で動くというのもあったかな。だから行事ごとに「（こういうことするから）こーしいや、あーしいや」というの（日本に長くいたら分かる動き方や手順のようなもの）を個人的に伝えてました。そういう時も、村上先生が来るまではコミュニケーションの8割が英語でしたね。自分の思っていることを伝えられないフラストレーションがあったと思います。<sup>7</sup>

こうした生徒間の関係性については、実際にも教師たちの議題にのぼることは多い。筆者がX高校の連絡協議会の様子を見学した際に、生徒間のトラブルや、元気そうにしているかどうか、遅刻や欠席の状況はどうか、また遅刻や欠席が続いていればそれはどういった理由かなどに議論の大半が費やされていた。このように、とくに特別枠生徒と関わりの深い担任教師や学年主任などの教師は、とりわけ特別枠生徒の構築する人間関係に気を配っており、教師にとって生徒がクラスに馴染むことが何よりも重要とされていることがわかる。

とはいえ、教師にとって特別枠生徒が構築する人間関係とそのメリットは、特別枠生徒だけが享受するものではない。以下の語りがあるように、特別枠生徒と人間関係を築き、困ったことがあればサポートする日本人生徒にもメリットがあると考えている。

鈴木先生：そうやって皆で困っている生徒を助け合うことで、たとえば「こういうところが分かってないんやな」とか、「こうしたらできるんやな」っていうのがサポートする方も分かってくる。それが結果的に回り回ってサポートしてくれる子らのためにもなるんだと思います。<sup>8</sup>

鈴木先生によれば、生徒間で共助の関係性が構築されれば、サポートされる側だけでな

く、サポートする側にも良い影響があるという。生徒がお互いに助け合うことが、お互いの理解を促進し、また自分自身の成長にもつながるというのである。こうしたサポートする側の成長は他の教師も期待しており、実際に特別枠生徒との交流を通して、日本人生徒の成長を感じているようである。

湊先生：先生以上に友達、子ども同士での配慮や気遣いがうまいことしていると思いますね。授業なんかでも、先生が気にする以上に子ども同士でうまいことやっていて、スポーツだから何をしたら危ないとか、万国共通などところがある。そんな他の授業ほどの配慮はいらないかなど。それで周りの子どもも成長していると思います。<sup>9</sup>

以上のように、特別枠生徒と日本人生徒が人間関係を構築していくことは、特別枠生徒の学校適応につながるだけでなく、日本人生徒の成長にもつながると教師たちは認識している。教師たちは生徒同士の関係性構築を重視する指導観をもっており、それが特別枠という異文化的要素の強い制度とかけ合わさった時に、日本人生徒の異文化理解の涵養という発想を生み出すと考えられる。

## 2. 学校に求められるアカウンタビリティ

これまで、特別枠による外国人生徒の受け入れに対して、教師が異文化理解という制度

の趣旨とは異なる意味づけを追加的に行なっていることを確認してきた。そしてその構造的要因の1つとして、関係性重視の指導観の存在を指摘した。最後に、こうした文化的基盤よりも広い文脈から、教師の意味づけに影響を及ぼす要因を検討する。

先に油布(2015)の指摘を整理した通り、現在の高校は、管理教育への反動から「心地のよい学校=居場所」としての機能をもつことが目指されている。実際に、こうした意識は鈴木先生の以下の語りからも確認できる。

鈴木先生:今とか、家に帰って「おかえり」と言ってくれる人がいない生徒って多いと思うし、「ぼっち」ではないかと思う。それは(特別枠生徒)Aも同じだと思うし、それに対して、私、村上先生、当時の主任で公式・非公式に情報収集していました。<sup>10</sup>

鈴木先生は、現在の生徒は学校外でひとりぼっちになることが多く、いわば関係的資源が乏しい状況にあると感じている。だからこそ、教師たちは学校を生徒の居場所にしようと努めているのである。こうした状況においては、関係性を重視する指導観はその存在意義を疑われることはなく、むしろ状況に対して機能的適合性が高い指導観となっている。

一方で、「心地の良い学校=居場所」を目指せば、その反動として学校にはアカウントビリティが厳しく求められ、学校は両者の板

挟みにもなる。本稿の事例においてもアカウントビリティの存在が確認されたと同時に、以下の語りにあるように、アカウントビリティが特別枠に対する教師の意味づけにも影響していることが確認できる。以下の語りは、本稿第2節第2項で用いたインタビュー結果の続きも含めたものである。先述の通り、異文化理解への期待は職階ごとに異なり、とりわけ管理職のそれへの関心は担任教師よりも強かった。その例として以下のインタビュー結果を用いたのだが、本来そのインタビュー結果には下線部分が続いている。つまり、井岡先生が筆者に対して、「もっと他の生徒(日本人生徒)への影響とかアンケートとったらいいんじゃない?」と語った後、「アンケートとってもらってその報告をレジメ1枚くらいで出してもらったら、県(教委)にも報告できるしね」と続いている部分である。

井岡先生:さっき先生方に話を聞いていたみたいだけど、全体の(全生徒に対する)アンケートとかしたら? 学年主任の先生にでも頼んでみたら協力してくれるでしょう。

筆者:ありがとうございます。伺ってみます。

井岡先生:お互い、win-winの関係でしょう。ものすごくお金かかってるしね、これ(特別枠)。もっと他の生徒(日本人生徒)への影響とかアンケートとったらいいん



じゃない？アンケートとっても  
らってその報告をレジメ1枚く  
らいで出してもらったら、県（教  
委）にも報告できるしね。<sup>11</sup>

特別枠をめぐるのは、特別枠生徒の状況などをまとめた報告書を県教委へ提出することになっていた。アカウントビリティのプレッシャーは、特別な予算がかかっている特別枠ではとくに強くあらわれるようである。とりわけ、校長や教頭などの管理職になれば、教育委員会から求められるアカウントビリティにいつそう敏感にならざるを得ない。

ここまで、生徒同士の関係性構築を重視する教師文化や、行政から求められるアカウントビリティによって、制度の趣旨とは関係のない異文化理解という意味づけが教師によってなされることをみてきたが、そもそも、異文化理解という効果は特別枠の趣旨から外れるものであり、そうした意味づけは「追加的」なものである。

一方で、現在の高校は小中学校と同様に、教師の多忙化がいつそう問題になりつつある。実際に、X校で特別枠のコーディネートを担当する藤井先生は、多忙ななかで特別枠のコーディネートを続けており、「このままだと（自分自身が）潰れてしまう」とまで語っている。藤井先生がこのように語るのには、日本の教師の職務の多さ、不確実さ、曖昧さ（久富，1994；久富，2003）などにより、教師が対処すべき問題が現実的には「外国人」や「格差」だけではないという理由があるだろう。

関係性重視の指導観やアカウントビリティの影響があるとはいえ、藤井先生が「潰れてしまう」とまでいう多忙を感じているにも関わらず、なぜ制度として求められていないような異文化理解という効果を特別枠に期待するのだろうか。そうした疑問に対しては、山崎（1996）のいう教師の「まじめさ」というハビトゥスという概念を通してみると理解できる。こうしたハビトゥスは、日本人生徒への異文化理解について教師の90%が多かれ少なかれ期待していたことに表れている（図1参照）。教師の「まじめさ」というハビトゥスゆえに、こうした労働環境にもかかわらず特別枠の趣旨以上の教育的意味づけを求めていると考えられる。

## V. おわりに

本稿では、教師へのインタビュー調査を通して、外国人生徒を受け入れることの意味づけとそれがいかにして形成されるのかを検討してきた。そこから見えてきたのは、教師が特別枠をその趣旨とは異なるかたちで読み替え、現場が重視する価値観と接合しようとしていた姿であった。

しかしだからと言って、本稿で検討してきた異文化理解という現場が重視する価値観への接合作業が、自文化中心主義的な学校文化のもとでの「『博物主義的』な文化交流」（見島，2006，p. 207）だとする解釈に結びつけるには無理がある。なぜなら、教師の実践を拘束していた生徒同士の関係性構築を重視

する指導観は、たとえば生徒同士の共助という点にあらわれていたように、外国人生徒と日本人生徒のどちらか一方だけに恩恵を与えるものではなかったからである。本稿では、教師の仕事が無限定的かつ不確実な中でも、特別枠生徒への配慮のあり方を模索しつつ、一方で異文化理解という新たな「教育的可能性」をも教師は模索していたとみれるのである。こうした教師の姿には、新たな意味づけを模索することによって彼ら自身が多忙化していくなかでも、誰にとっても、何が「より良い」指導かという絶対解のない問いに向き合い続ける様相が映し出されていると解釈すべきである。

このことは、従来の教師研究では「教師については過剰に語られているが、これまで《当事者》の声に耳を傾けることが少なかった」（油布・山田，2018，p. 411）との指摘を踏まえればいっそう重要な意味をもつ。とくに、外国人児童生徒の教育研究は、「教育問題という初期の発想に忠実なスタンスを保持」（越智・紅林，2010，p. 118）しており、教師の置かれた現状を考慮するという視点が弱かったことを考えると尚更である。

以上の議論を踏まえ、本稿では、外国人児童生徒の教育研究でも、「教育問題」に忠実になるだけではなく、教師の声を聴き、教師の置かれた現状やそこから構成される教師の側の論理を汲み取った上で、「適切な」教育保障の議論を進めていく必要があると考える。

## 参考文献

- 稲田素子（2012）「帰国生徒の受け入れにおける公正さをめぐって—実績のある受け入れ高校を事例に」『異文化間教育』第36号，pp. 40-56。
- 乾美紀（2008）「高校進学と入試」志水宏吉編『高校を生きるニューカマー—大阪府立高校にみる教育支援』明石書店，pp. 29-43。
- 川崎誠司（2012）「異文化間教育におけるエクイティ—高等学校教育における公正さの構築」『異文化間教育』第36号，pp. 19-25。
- 児島明（2006）『ニューカマーの子どもと学校文化—日系ブラジル人生徒の教育エスノグラフィー』勁草書房。
- 児島明（2016）「中学校・高校と文化接触」異文化間教育学会（企画）加賀美常美代・徳井厚子・松尾知明編『異文化間教育学大系 第2巻 文化接触における場としてのダイナミズム』明石書店，pp. 50-64。
- 久富善之編（1994）『日本の教員文化—その社会学的研究』多賀出版。
- 久富善之（1998）「教員文化の社会学・序説」久富善之編『教員文化の社会学的研究』多賀出版，pp. 85-146。
- 久富善之編（2003）『教員文化の日本的特性』多賀出版。
- 宮島喬（2014）『外国人の子どもの教育—就学の現状と教育を受ける権利』東京大学出版会。
- 中島智子（2008）「連続するオールドカマー／ニューカマー教育」志水宏吉編『高校を生きるニューカマー—大阪府立高校にみる教育支援』明石書店，pp. 57-74。
- 越智康詞・紅林伸幸（2010）「教師へのまなざし，教職への問い—教育社会学は変動期の教師をどう描いてきたのか」『教育社会学研究』第86集，pp. 113-136。
- ロールズ，J.（1979）（田中成明編訳）『公正としての正義』木鐸社。
- Shimahara, N. & Sakai, A.（1995）*Learning to Teach in Two Cultures : Japan and the United States*, Garland.
- 角田仁（2012）「多様化する夜間定時制高校—外国につながる生徒をめぐる公正さの概念の変遷—」『異文化間教育』第36号，pp. 26-39。
- 山田哲也（2018）「教師という仕事」日本教育社会学会編（稲垣恭子・内田良責任編集）『教育社会学のフロンティア 2 変容する社会と教育のゆくえ』岩波書店，pp. 123-143。
- 山本晃輔（2014）「在日外国人と教育」，pp. 146-153，志水宏吉・高田一宏・堀家由紀代・山本晃輔（2014）「マイノリティと教育」『教育社会学研究』第95集，pp. 133-170。
- 山崎鎮親（1996）「学校制度の中の教員文化」堀尾輝久・久富善之編『講座学校 6 学校文化という磁場』柏書房，pp. 117-150。

- 吉田美穂（2018）「高校における生徒指導」日本教育社会学会編『教育社会学事典』丸善出版、pp. 434-435。
- 油布佐和子（2015）「高校の多様化と教師」油布佐和子編『現代日本の教師—仕事と役割—』放送大学教育振興会、pp. 66-87。
- 油布佐和子・山田浩之（2018）「概説：改革の時代の教師と教師研究の現在」日本教育社会学会編『教育社会学事典』丸善出版、pp. 409-411。

## 注

- 1 2016年11月、2017年1月、2016年10月のインタビューより。
- 2 2017年11月インタビューより。
- 3 2017年11月インタビューより。
- 4 2017年11月インタビューより。
- 5 2017年10月インタビューより。
- 6 2017年11月インタビューより。
- 7 2017年11月インタビューより。  
なお、村上先生は特別枠が実施された約半年後にY高校へ赴任しており、日本語教育の専門家でもあることから、赴任後は校内支援制度のコーディネートをこなしている。
- 8 2017年11月インタビューより。
- 9 2017年10月インタビューより。
- 10 2017年11月インタビューより。
- 11 2017年10月インタビューより。

# A Study of How High School Teachers Give Meaning to Schooling of Non-native Students in Japan

OHIGASHI Naoki\*

## Abstract

This paper describes (1) what kind of meaning high school teachers give to schooling of non-native students in Japan, and (2) by what kind of factors the meanings are constructed. Its purpose is to show the significance of paying attention to not only researchers' concern but also teachers' one through the analysis. This study analyzes teachers' recognition from the perspective of teacher culture and accountability required for schools.

The findings are as follows. Firstly, the results of interviews confirm that the teachers give two meanings to schooling of non-native students in Japan. One is that schooling of the foreign students is the opportunity to correct the enrollment gap between the Japanese and foreign students, and the other is that the increase in the enrollment rate of the foreign students is also opportunity to deepen cross-cultural understanding for mainly Japanese students. Secondly, the results of analysis indicate that Japanese teacher culture which focuses on developing the relationship among students influences the latter meaning. In addition, especially high-ranking teachers such as principals are affected by the accountability required by the board of education. Moreover, even though teachers' work is getting busier, they try to make more meanings regarding the schooling of foreign students. These results show that the teachers are struggling to give some educational effect to both Japanese and foreign students in the face of various social and cultural constraints. From these discussions, this study concludes that the important thing is not only analyzes and criticizes teachers' practices in terms of researchers' concern, but also grasps the

---

\* Researcher, Graduate School of International Cooperation Studies, Kobe University.

circumstances surrounding teachers and their thoughts from their viewpoints in order to understand the structures of educational issues related to foreign students.